跡見学園女子大学国文学科報　第十九号（平成三年三月十八日）

雨中逍遙

――中世における〈執筆の身振り〉――

川平ひとし

「降る雨はふるし」
（宮澤賢治『春と修羅』「詩稿補遺」）[1]

中世文学のテキストの文章末に、時おり見出すことのできる

雨中

という語に注目したい。筆を執り物を書き綴ってきた著者が文章を閉じるに当って、ふと外の天候を思い遣って特に作意もなく記したかのような此の「雨中」には、どのような認識と表現が籠められているのか。「雨中」――あるいは「雨のうち」「雨のなか」――ということばから波紋のように広がる事どもについて、しばらく考えを巡らせてみたい。おそらくここでの若干の考察は、中世における〈物書く〉行為と〈物書く〉主体のあり方を検討することに遠く繋がってゆくものと思う。

1　『実隆公記』別記「出家仮名記」から

たとえば『実隆公記』の別記の一つである永正十三年（一五一六）四月「出家仮名記」[2]に、次のように記されている。

いま清人の河上の逍遙にもあらす、荘子か九万里の逍遙遊にもあらす、ひとへに弥陀の宝国に逍遙せん事をおもひて、此字をとりて身つからの称号とせり、雨のうちのつれ〳〵に日比の心のうちをしるしつけ侍り、あなかしこ〳〵

此の「出家仮名記」には、四月十三日の落飾とその後の経緯を通して、筆者三条西実隆（堯空）自身の心境がこまやかな仮名文体で記されている。家集『再昌草』の当該箇所と相補う実隆伝の印象的な一齣であり、同時に此の記全体がさながら信仰告白の一掌篇になっているとも言えよう。右に引いた部分は、その「仮名記」（以下此の略称による）の末尾、四月「廿六日」の条の続きにある。今、注目したいのは私に傍線を付した一文――真名文体なら恐らく「雨中」と記されていたであろう「雨のうち」という語句を含む一文の持つ表現性についてである。

右の引用に到る部分で筆者は、自ら選んだ道に照らして、父

祖や一流の人々の出家の例を想い起し、僧俗の知友と交した和歌・詩の贈答や、折に臨んで心中深く立てた誓願の条々を載せ、また先掲のように「逍遙」という已の称号の謂われを強調することによって、言わば出家の意志を再確認しているが、かくして書き綴ってきた文章の末尾を結ぶに際して、筆者は折から外に降る〈雨〉を思いやっているのである。それが先程の「雨のうち」云々の行文であろう。いささか図式的に言えば、出家入道という深い決意にまつわる内面の思念が外部の自然・天象に包まれて一体一如となった、満ち足りた時を此の「雨のうち」の一文で語っているのである。ここに見られる表現、すなわち内面の情況を叙述し来った文章を閉じるに当って、「雨のうち」という外部の情景を併せ記すという表現に注意したいと思う。

ところで「雨中」という語の含み持つ中世語としての意味や情調の広がりについては、『宗祇畳字百韻』中の用例、

風待て逗留したる湊舟
苫やの雨中おもひこそやれ
われひとりいかゞ徒然を慰まん

に即して、漢詩の用例と語感、『連珠合璧集』の「つれづれとあらば雨中」という記載、『犬子集』の「徒然(とぜん)にも降りくらしたる雨のなか」などの用例の指摘と併せて、既に精細に読解されている。[3]

ほぼ同時代の右のような「雨中」の用法を傍らに置いて先の「仮名記」を読み返すと、問題の「雨のうち」云々の一文は、当代の表現状況の中では既に熟した言い回しであり、むしろ時代の共同の想像力に訴えて一定の気分を喚起する常套句ですらあったことになろう。してみると、雨中あるいは雨のうちのつれづれに筆を執って物書く、という文辞は文章の閉じめに用いられる文学的な装い、もしくは仕掛けではなかったか。「雨のうち」云々は言わば〈執筆の身振り〉の表現として文章末に据えられており、「仮名記」末尾の記載もまた、そのような表現類型の姿を伝えているのではなかろうか。

ただし右のように直ちに言い切るにはなお、当面の対象である「仮名記」自体に密着して、

(イ)「文章末」に置かれた文言であるという認定
(ロ)文学的「表現」としての位置づけ
(ハ)表現上の「類型」と見做しうるか否かの判断

につき、少し付言しておくべきであろう。なぜなら、たとえばここでの論議の前提となる(イ)について見ると、「仮名記」の記載内容は先引段落で果てている訳ではなく、同部分の後に、夢庵肖柏との贈答(再昌草にも見える)、実隆(「桑門堯空」の署名あり)の偈とこれに対する寿桂・公条・高辻章長・五条為学・瑞佐らの和韻が録され、さらに出家後約ひと月の五月十二日・十五日の記事まで書き継がれているからである。形態からすると「雨のうち」は決して文章末に置かれているのではないのである。

しかしながら「あなかしこ〳〵」という文末語から既に明らかなように、本来「雨のうち」を含む此の一段をもって「仮名記」は結ばれるはずであった。事実、出家翌日の、此の条りに先行する四月十四日に相当する記載の中には、次のような内部徴証も存在する。

又素懐をあらはし侍る詩をかきて月舟和尚(寿桂)のもとにみせつかはし侍し、やかて和韵あり、おくにみなしるしつけ侍るへし(傍点川平)

右に云う「詩」とは「あなかしこ〳〵」の奥に見える先記の偈四句(再昌草には四月廿六日の後にあり)に他ならないから、「雨のうち」云々を含む一段は、一連の出家の記録の「おく」に、まさに掉尾に記す表現として意図されていたのである。

しかしなお右述した通り、文章末の結語を逸れ出る形で記事が存在していることも事実であり、「仮名記」全体は必ずしも形式的に整備されていないと言わねばならない。事は主として―『再昌草』との連関をも含めて―「仮名記」[4]の執筆・成立の時点の問題にかかわっていると思われるが、今は右のようなテキスト上の事実のみを見ておくに止めておこう。ともあれ現れているこうした文章構成を無視しないとすれば、私たちは先記した(ロ)の問題を考慮しない訳にはゆくまい。すなわち「仮名記」はどこまで文学「表現」として醇化の施されたものなのか、文学的な「表現」をもった作品として真に評価しうる内実を備えているのか否かという問いである。しかしここで私たちは「文学表現」の根拠やその用語法、此処の場合で言えば公卿日記の記録性と文学性の関係、広くその文学性如何などの、原理的な問いを改めて試みようとは思わない。確かに、「文学表現」としての記録という見方の前提にかかわる私たちの用語法は、理論的・方法論的な蓄積を十分閲し、且つ研究史[5]における一定の前提を既に形作っているとは言い難いものの、今仮りに、言語表現のほとんど全てが私たちの追究の対象となりうるという、単純だが最も根本的な観点に立てば、出家時の事実と感懐を、時を逐って、また自他の詩歌を所々鏤め、仮名文体で綴っている此の「仮名記」を、同じく実隆の手に成る日記の別記である「西山参鉆寺参詣仮名記」(永正十七年十一月)や「高野山道の記」(大永四年四月五月)と全く同等の次元で、書き記された〈表現〉として分析することはもとより可能なのだと考えたい。

実際のところ、「仮名記」における筆者実隆は、ことばの綾を十分計算しながら文辞を練ることに極めて自覚的である。「雨のうち」云々の〈執筆の身振り〉自体まさしくその種の意識の現れに他ならないのだが、それを証示するために、そうした筆者の姿勢にかかわる点を、次の二つについて見ておこう。

一つは、〈執筆の身振り〉の直前に見える称号「逍遙」をめぐる記載である。先にも記したように、称号の「逍遙」は何より「ひとへに弥陀の宝国に逍遙せん事」を標示したものであることを筆者は強調しているのであるが、それを云う条りの叙述は極めて生彩に富むと言ってよい。まず、

我そのかみ不肖をかへりみす無能をはちす、難波津・筑波根の道に心をかけ、風月詩酒のむしろに逍遙せり

と記して、和歌・連歌・詩文の風雅の世界の「逍遙」に自から進んで淫しもしたことを述べ、次いで、

いま暮齢むそちにあまり、ねかふ所は九品上生の往詣なりと記す。共同の場のすさびに身を委ねて遊ぶのではなく、今はひとり往生の道へ赴くことを庶幾するのであることが云われる。そして後段では、『詩経』鄭風、清人の詩句に見える黄河の辺りに立ち迷うという喩をもって、己の求めるのは軍事をも含む現実政治の世界における「逍遙」ではなく、また同時に、現実の巷を超脱した『荘子』に云う優游自在の「逍遙」でもないと、数々の次元の「逍遙」のありうることを言挙げ提示して、それらを全て斥けるのである。その上で先記のごとく、揺ぎない目的をもった旅程の末に到達しうるはずの、在るべき「逍遙」を強調しているのである。それを云うために筆者は、善導『観無量寿経疏』定善義、更に『般舟讃』『法事讃』『往生礼讃』から各々「逍遙」の用例を含む句を引用している。選ばれた句の並びは巧みと言ってよく、漸層的に庶幾する「逍遙」の境地が示されている。筆者はよくよく出典・用例を選び抜き、文彩を考慮し、行文を緊密に整序しており、無作為の記述とは立場を異にする叙述方法となっているように見える。筆者の〈書く〉姿勢を思うべきだろう。

このように、操作しながら行文を練っているという側面を、次の第二の点にも見出しうる。

先掲の通り「仮名記」は「雨のうち」云々の一段をもって一旦結ばれたはずである。その日付は四月二十六日である。

ところが此の二十六日の京の天候は恐らく「雨のうち」ではなく、晴天であったと推定される。この点に少し立入ってみよう。

日記に日々の天候を漏れなく——自筆本によれば時に補入を律義なまでに加えるなどして——細記していると目される近衛尚通の『後法成寺関白記』[5]（尚通公記）によれば、此の月の天候の記載に「晴」字の見えない日はほぼ無く、ことに二十六日以前はさしたる乱れも無く晴天が続いていたようである。すなわち十五日から十九日まで「晴」とあり、廿日「晴、小雨散」、廿一日・廿二日・廿三日「晴」、廿四日「晴、小雨濺」、廿五日そして問題の廿六日には「晴」とある。廿六日の時点で、現実の天候は「雨のうちのつれ〳〵」などという情況をもたらしようもなかったと考えられるのだ。「仮名記」の日付を信じ、且つ此の尚通公記の記載に従えば、「雨のうちのつれ〳〵」はまさしく虚構であったことになるだろう。

ただしなお事実性に固執すれば、眼にとまるのは、その後の天候である。これも尚通公記に、「仮名記」の問題の条りが記されたとおぼしい二十六日の翌日の、廿七日のみは、例外的に「陰、雨下、（此の三字補入）雷鳴頻」の如くあり、廿八・廿九・卅日は再び「晴」と

なっている。この記事を踏まえて辻褄を合わせれば、

二十六日、筆を執り続けたままその夜は明け、実隆の筆が文章末にまで達したのは既に翌二十七日の時点であった。

「雨のうち」云々は尚通公記の云う「陰、雨下、雷鳴頻」という二十七日の天候のもとで記されたのだ

のように、合理的と見られる推測を立ててみることもできよう。しかし、このようなやや窮屈な読解を採用しないとなれば、そもそも日付は決して執筆という行為そのものと直接的に、また現実的に即応していたのではなかったと考えることができる。あるいは「雨のうち」云々の文辞すら、現実の天候自体と照らし合わせる必要などないのかもしれないのだ。そのような眼で見れば、二十六日をずっと溯る実隆出家の前々日、十一日の尚通公記の記事に、

晴、入夜雨雹下、雷鳴、五六十年以来未聞次第云々、宿鳥霰ニ被打死云々、消魂

また翌十二日条に「雨降」とあり、前日の「消魂」と記された程の天候のために雹雷に関する勘文すら奉られていた（尚通はそれを十二日条に書留めている）のは注意される。すなわち実隆の落飾の前々日は異変とも見られる悪天候で、その名残りの雨は十二日まで続いていたようである（右の甚雨のことは「仮名記」の前段にも見える）。仮名記の「雨のうち」は、この雨・雹・雷鳴の印象が無意識の底に沈澱していて、それがほぼ十数日後、実隆の脳裏に再び浮上し、ことばとして表現せしめられたものだ、という具合に臆測を更に進めることもできる。

ともあれ四月二十六日時点での〈雨〉は、実隆の現実の知覚であるよりは、むしろ観念の所産であったと見做すべきかも知れないのである。「雨のうち」の一文は、生身の実隆の生活時間と出家入道した者の観念の時間の二つの重なり合う時間の中に、現つとも虚構とも綾目もわかず――現実でもあり、また記憶の中の心的な映像でもあるものとして――紙上にすべり込むように書留められた〈表現〉であったと解したい。

ところで、このような〈雨〉にまつわる表現は実隆「仮名記」のみに見られるものではもとよりない。むしろこれは一つの類型であって、中世における〈雨中〉の用例を他にも見出しうる。

2　一筋の流れ

〈物書く〉行為と、「雨中」あるいは「雨のうち」という表現が結びついている例を幾つか拾い上げてみよう。のちのちの例は措いて、「仮名記」の時代以前の目ぼしい例を、歴史軸を溯って順に記してみよう。

(a)　一　定家卿は父卿に四十四歳まで立そひ有也。如レ此事等、家集或被レ書抄奥書等を見合せて注し畢。定而誤多あるべし。

寶徳四年五月廿一日雨中なり。

（『東野州聞書』）

(b)

建仁元年五月日
本云　天福二年五月日書写之
古来風躰抄上下一帖、愚本依紛失之事申出　新院御本写之畢、件御本即家本也。
正中二年林鐘四日雨中扶病身終微功而已

藤為基在判

（『古来風躰抄』再撰本奥書）

(c)

弘長之比、任先人之庭訓、後学之遺鏡、不顧老眼之不堪、雨中記之、当家之外莫出他家、努〻可秘之

桑門融覚在判

（『詠歌一躰』広本、流布本（二条家系統本、第二類）「八雲口伝」奥書）[7]

(d)

承久三年三月廿八日

雨中注二付之一　八座沈老在判

（『顕註密勘』奥書）

(e)

フルキ人ノサマ〴〵ノ物語ヲ、オノヅカラ廃忘ニソナヘンガタメニ、カキアツメ「テ」侍シ。ワスレテ年ヲヘテ、ハコノソコニクチノコレリ。イホリヲハラフ塵ノ中ヨリモトメイデテ、クラシカネタル雨ノ中ニコレヲシルス。ミヅクキノフルキアトヲアラタメテ、ヤマトアシ原ノコトグサニカキナガス。コレ猶要ナキシワザナリ。ハヤクケブリトナスベシ。建保ナ、トセノ卯月ノシモノ三日コレヲシルス。

（『続古事談』跋文）[8]

これらのうち(a)は一纒まりを成す一つ書きの条々の後にあるけれども、決して著書全体の末尾に見える訳ではない。また(b)(c)(d)はいずれも奥書であり、うち(b)は書写奥書であって自己の著作の末に据えられた文辞ではない。このように(a)〜(e)の形式はまちまちである。しかし惣じてこれらは、〈筆を執って物書く〉という行為を、その行為の一区切りを示す部分において「雨中」「雨ノ中」の語とともに確認している例である。ここに一つの表現類型を認めることは許されるであろう。そのようにして記しつけられた「雨中」「雨ノ中」の文辞の後の余白に、一種の残像が漂っていること、そしてそれと共に、各々のテキストに対している者たち、すなわち(a)〜(e)の筆者や筆写者たちの、「雨中」によって増幅されるかのような秘かで深い感情移入が伏在しているのを読み取ることもまた許されるであろう。では、ここに一つの表現類型のもとで生じている残像と心情とその内質は一体何なのか。

無論(a)〜(e)の記しつけられた折、それぞれ外の天候は雨であったと想像してよい。恐らく事実はそうだったと考えるべきなのだろう。たとえば(b)のテキストの位置を明らかにした井上宗雄が「因みに」として、奥書の日付に見える通り「花園院宸記によってもこの日は雨である」[9]と指摘した如くにである。「雨中」の語は単に客観的に記述された天候を意味するに過ぎないとも見られる。しかし先程「仮名記」の実隆の場合で述べたように、事実性の半面もしくは裏面に、単なる記述を越えた〈表現〉を

読み取ってよいのだとすれば、私たちはこれらの〈表現〉にもう少し接近してみたいと思う。(a)〜(e)を順次読み直してみよう。

(a)で日付が明記されているのは『東野州聞書』の全体的な形式に即してのものであって、ここのみの特異な事例という訳ではない。またこの「雨中」は先述のように著書末の文辞ではないが「如レ此事」云々とある通り、前後に一連りの意識を認めうる。すなわち(a)を含む条は、定家・俊成の閲歴を略記した二つの条の並びにある。(a)の内容に即して理解すれば、常縁は自ら瞩目し手にしえた俊成・定家らの種々のテキスト類を勘案して、これらの条々を録しているのである。他ならぬ定家（や俊成）らに関する知見を述べることを、日付を明示し、特有の気分を持つ「雨中」の語を添えて記していることに注意したい。

(b)の言辞の筆者である二条家庶流の為基と、彼をとりまく歌壇史の脈絡、そしてこの時点を溯る文保の頃、解官されて山里に籠居してもいた為基の閲歴などについては、(b)を直接採り上げている井上宗雄に詳しい。[10] 所持本を紛失して『古来風躰抄』を手許に備えていなかった為基は、この折、天福二年七三歳の定家の本奥書のあるテキスト――「家本」に由来する花園院御本――を申し出で、病身を自ら扶けながら書写し終えたのである。今、表現としての「雨中」に注目すると、ここにもまた、父祖の著作を書写するという行為に従っているゆえの深い思い入れが介在していることは明らかであろう。

(c)の文辞を採り上げるには、『詠歌一躰』（甲本）の真作・偽作を問題にせざるをえないけれども、ここでは、(c)の奥書をも含めて為家の筆になるものであることをひとまず前提として読んでみたい。

ここでも雨中に執筆するという行為は何がしかの程度で、書く主体の心の昂揚もしくは深い感懐と結びついているように見える。当の行為は父祖の教説（直接には先人定家の言説）、ひいては「当家」の根拠に繋がる。すなわち〈家〉の意識と共に語られている。『詠歌一躰』に示されているのは為家の見解に他ならないけれども、それはひたすら一個の独自の認識として提示されるのでなく、むしろ自家の由緒と系譜に裏打ちされたものとして位置づけられるのである。(b)・(c)は、片や転写、片や著述と主体の作業は異なるものの、筆執る行為が個を越えた、あるいはむしろ個を包み込む高次の価値によって支えられているとする意識において、互いに重なり合っている。そして「雨中」の時と情景は、そのような主体の意識を矛盾なく即自的に憩わせてくれるものとしてはたらいているとも言えよう。

(d)は六十歳の年、藤原定家の記したものである。顕昭の古今集註釈に対置して、清輔の説をも参照しながら自己と自家の見解を記すという事情は『顕註密勘』のやや長い跋文中に細述されている。(d)はその奥に簡略に記しつけられている文辞である。この「雨中」を署名・年時と併せ読むことによって、私たちは言外の文脈を掬い上げることができる。「八座沈老」（「八座陸沈遺

老」の異文あり）は六十路に達して老いに沈む者と、単に今の己の齢を示したのみではあるまい。「八座」と建保二年以来の官職（参議）をほのめかしている点に、承久三年三月二十八日（同二十二日の異文あり）という時点を考え併せるべきだろう。周知の通り定家は、この前年二月十三日の内裏和歌会における詠歌のゆえに後鳥羽院の勘気に触れ、以来公的な催しへの出仕を止められていた。その間、『順徳院御記』に「暫不レ可二召寄一之由、自レ院被レ仰」（承久二年八月十五日条）と記されたまさに同時期の同二年八月、新院（土御門院）から歌を召されたこともあったことは、家集自筆本の切除された箇所に補写されている歌々の中から窺うことができる。[11]しかしそれとても、「新院よりしのびて召されし」（当該歌詞書）とあるように非公然のものであったと考えられる。

このように、この時期の定家は〈公〉に対する〈私〉的な時間を強く意識しないでは居られなかったはずである。そうだとすれば、公的な呼称にかかわる「八座」の官職名に、私的な情意を含む「沈老」をあたかも嚙み合わせるように記したことには深い意味が籠められていたのではなかろうか。[12]その上(d)には背後に政治史的な文脈も伏在している。のちの歴史から見ると、この時期は承久の乱のまさに直前に当っている。『愚管抄』を一旦記し了えた慈円が、政治の動静と世情の帰趨を冷徹に観察していたであろう頃、定家は、心的には公の世界からやや距離を置き、蓬戸を閉ざすようにして（「仍暫閉門」『順徳院御記』承久三年二月二十二日条）、ひとり古今集註釈に力を注いでいたと考えられる。かくして「雨中」のこの日、二十巻に亘る説を注し付け終えたのであるが、「雨中注二付之一」の短いことばは己の作業総体とこの間の時の経過――註解を終えるのにどれ程の時日を要したか不詳であるが――を確認するように記されたものと読むこともできるであろう。

(d)を約二年溯る(e)においても「雨ノ中」は生き生きとした語感をもって用いられている。注意されるのは、この「雨」を知覚しているのは「イホリ」の中にある主体であり、「雨ノ中」は草庵中の徒然の時間を背景として語られていることである。この説話集を編録した主体は現実に庵を結んでいたか否かをここでは問うまい。(a)～(d)を辿ってきた眼で眺めれば、「雨ノ中」は設定された空間としての「イホリ」の中における執筆の身振りと捉えうる。惣じて(e)の跋文全体に筆者（＝創作主体）の、言辞を選別しながら書こうとする修辞的とも呼びうる志向が漂っているように見える。「雨ノ中」も一面でことばの綾を含む表現なのではなかろうか。ちなみに「雨ノ中」を修飾している「クラシカネタル」の「くらしかぬ」は早くより用いられている和歌的表現である。ただしその用い方は、たとえば『枕草子』三〇一段（日本古典文学大系本）に見える、

雲の上もくらしかねける春の日を所がらともながめつるかな[13]

の、春日遅々の徒然の情緒や「くらしかねける」という言い回しそのものに対する王朝人の語感とは異なる。また、

けふをだにくらしかねつるささがにのいとにかかりてあすま

でやへん　　（朝光集・六四）

のような男女の恋の憂愁や惓怠をめぐるものとも異なる。それらの情緒から抜け出て、ここでは草庵的な時空の、長雨の頃の徒然を伝える表現として選び取られたのだと解したい。

無論「雨ノ中」を含めて(e)をひとしなみに虚構と見做すのは当らない。説話群を採録し叙述し終えた折の筆者の思念に、外の「雨」はどのように浸み入っていただろうかと、創作主体が体験していたはずの現つの時間と情景を、私たちは想像することができる。また、既に四月十二日、承久へと改元されている建保の終りの年次を月日と共に明記していることに、筆者のどれ程切実な〈今・此処〉の意識が介在しているのかと――(d)の定家の場合とほぼ同様に――推測を巡らすこともできるであろう。つまり「雨ノ中」は、ことばによって作られたもの、言語的な機制でありながら、同時に生身の筆者のまさしく眼前に在る景であり、何事かを訴えかけすらする実際の大気の気配を伴っているのである。

このように鎌倉初期から宝町後期に至る、中世の幾つかの地点に跨る用例を並べてみると、「雨中」「雨ノ中」を一つの表現類型として確認しうるとともに、当の表現の輪郭をも幾分か窺いうると思う。これらの「雨中」の諸例に自ずと滲んでいる表現性について少し敷衍してみよう。

以下のような幾つかの系のもとで理解することができるだろう。

私――公
内――外
自己――他者
個――衆

(a)～(e)の「雨中」「雨ノ中」はいずれも〈公〉に対して〈私〉的な世界が存在するという意識の姿を伝えている。「雨中」の語自体、公的な性格をもつテキストの末尾になど、恐らく決して書き込まれることはなかったであろう。「雨中」の時と情景を或る深度をもって知覚する主体とは、私的な領域においてまさに〈私〉となった主体に他ならない。従って「雨中」という表現の背後に介在しているのは、〈外〉の世界から切離された〈私〉の心の〈内〉側――心想の内質――を凝視し観照する主体である。そのような主体に思索と沈思をもたらす〈内〉的な時間――あるいは観想の時――が介在していると言換えてもよいだろう。さらに言えば、ここにあるのは、他者たちの織りなす外部の現実世界には決して解消することも、還元することもできない、〈自己〉ひとりの〈個〉的な時間と空間が存在することを強く認識している主体である。(e)において、草庵的な空間が設定され、その内にある視座――すなわち庵中・廬中の視座――をもつ者の思念が語られているのは象徴的な例だと言わねばなるまい。

以上のような脈絡をもつ〈私〉〈内〉〈自己〉〈個〉の各項によ

って繋ぎとめられた主体を、何と名付ければよいだろうか。今、この主体を〈観照主体〉という概念を援用して呼んでおこう。観照主体は、経験的世界に在る主体ではなく、広い意味の詩的世界にかかわる主体――〈詩的主体〉[15]――の一形態である。それは作品に立ち現れる〈表現主体〉や〈作中主体（作品内主体）〉の側ではなく、〈創作主体〉もしくは〈書く主体〉の認識の領域に属している。書く主体は、生身そのものはもとより現実の世界に在りながら、ことばを書き連ねる行為を通して、現実とは相対的に別の時空に在る〈観照主体〉を現つの時空に導き入れて、書く主体自身と同一化する――もしくは書く主体を観念的に二重化する――のである。「雨中」に即して言えば、(a)～(e)の筆者もしくは筆写者たちは、「雨中」の時と情景を心に染めて個的世界の内深く沈潜する〈観照主体〉に、己を重ね合わせながら、文章の閉じめに「雨中」の語を記しつけるのである。「雨中」「雨のなか」「雨のうち」はこのようにして設定される表現上の機制もしくは機構――〈執筆の身振り〉――と捉えられる。而して私たちは、中世のテキストの末尾に時として立ち現れる此の〈身振り〉は、中世のテキストの時代性を告げる一つの徴標ですらあるのではないかという想定に自ずと誘われる。しかし性急な想定は控えねばなるまい。先の(a)～(e)それぞれの間で、身振りの設定をめぐって、個人性、情況、方法的自覚の度合、あるいは時期などによる相違を生じているように見える。単一の内容を備えた徴標を考える訳にはゆかないのである。それゆえ〈執筆の身振り〉の歴史性や位置を云うためには、なお検討すべきことが存在しており、差し当りその作業以前に、「雨中」の意味そのものを更に尋ねてみるべきだと思う。

3　〈雨〉の原イメージ

「雨中」という表現について前述のように敷衍しうるとして、では、なぜこのようにも「雨中」は深い思い入れ、むしろ過剰とも言える心情を伴うのだろうか。

無論私たちは次のように考えることができる。先の実隆「仮名記」以下のごとく、自己の情緒や心想・思念のおもむきが自ずと外の天象へ向かう意識に続くというのは、ごく有り触れた回路であると。対象としての自然や景物と主体の認識や心象とが深い諧和のもとに相互滲透するというのは日本文学における既に久しく且つ親しい認識―表現の構造だからである。[16]〈雨〉はありとある〈心〉を引き寄せ宥和するものである。

その上、打付けな言い方ながら、アジアの雨という側面もあるだろう。アジアでは〈雨〉はしばしば文字にかかわる者に、物書くことを促すモノであり契機であった。入木道書に、

雨中にもの書。かたく（乾）よし。身苦しからず、はやくかゝる。墨もかわかず。

（『夜鶴庭訓抄』[17]）

とあるように、書くという行為は、筆と墨と紙を用いる文化圏にあっては決して書記された文字の次元のみにかかわる行為ではない。[18]書くことと大気の気配とがむしろ親密にかかわってお

り、アジアにおいては、書くことは湿度を伴うのだ。[19]

ただし右のような認識の構造についての一般論や、風土論的-文化論的な観点を越え出るものを〈雨〉は含みもっている。それは雨の物質性だ。モノとしての雨は、類的存在としてのヒトに――住む地域の如何にかかわることなく等しく――根源的な物質的想像力をもたらす。それゆえ此地においてのみでなく、海彼の文学表現の中にも、稔りをもたらす恵みの雨や、反面で悪しきもの、厭わしいものとしてのイメージ、降る雨の量や質にかかわる連想、あるいは雨に濡れる者に生起する様々の情調を、幾らでも拾い上げうるはずである。すなわち〈雨〉はヒトにとって普遍的な「物質のイマージュ」[20]をもたらすものに他ならない。更に言えば、雨にまつわるイメージは生物史の中に人類史が始発して以来作用し続けてきたものと考えることもできる。それどころか此のイメージは敢えて言えばヒトの誕生以前の、霊長類の発生とともに存在したのではないか、とすら考えられる。[21]ともあれ原始以来ヒトは雨に幻想を抱き、また雨によって想像力をかき立てられてきたのではなかったか。そうだとすれば、人類史の始源以来、〈雨〉はヒトに対して〈原イメージ〉(プロトイメージ)を刻みつけてきたと言えるだろう。[22]小稿で観察しつつある「雨中」の表現をめぐる言辞と言外の余情を含む一切もまた、述べたような〈雨の原イメージ〉に深く根差すものなのだと言えよう。

思えば〈雨〉は大地を潤し、人をも含む地上にあるあらゆるものを、時に過剰なまでに濡らすものである。人の身と肌を濡らす雨は、その直接性ゆえに、人のエロスに訴えかけもするだろう。また雨は行く者の足を止め、自由な活動を妨げる。雨に敢えて濡れることを欲しないのなら、人は雨を避けて、家屋をはじめとする身を覆ってくれるもののもとで、雨の息む折をひたすら待つ他ない。かくして雨は必然的に空間の内側にある者――複数ではなく、ひとり――の視点を育み、内から見出される映像や、音・響き・しじま、さらには「聴雨」の時の最中にある自己の内部の深奥や、外部の遙かな世界へと至る夢想などの、様々な詩的表現のモチーフを生み出さないではいないだろう。

ただし今、心のどめてそのような雨のモチーフを逍遙することを暫く停めて、再び「雨中」をめぐる文辞とテキストの歴史的な場へ立ち戻ることにしたい。

4　後史――形式へ

「雨中」という〈執筆の身振り〉の中世におけるあり方を、更に精細に探索することによって、私たちは中世における物書く行為と、物書く主体の姿や位置に間近かに接することができるにちがいない。それはのちの課題であるが、次に当の「あり方」を、前史・後史に照らして尋ね、且つ位置づけてみたい。

「雨中」の後史は比較的明瞭だと思う。簡略化して言えば、中世ののち〈執筆の身振り〉は一層形式化されるに至る。形態について見ると、文章末に置かれる「雨中」の文辞は、先に見た中世の諸例同様に受け継がれる。ただし跋文的な文章の中において、より整えられた形式で用いられるのが常である。一方「雨中」の身振りは文章冒頭の序文的な部分に、あらかじめ設定される叙述の型ともなる。このように執筆の身振りが形式として定着するとともに、もはや序・跋のみにおいてことわられるばかりでなく、「雨中」の語は他の多くの「雨」を冠した書物たちと並んで、書名の一部に組入れられもするのである。

中世のテキストにおける文章末尾の身振りから、序文中や書名中により整頓された形式をもって据えられる身振りへ、というこうした推移を眺めると、この「雨中」という語にまつわる些細とも見られる文学的事象が〈書く〉ことの意識をめぐる中世から近世への転形という、より広範な問題とどのように結び合っているだろうか、という問いに私たちは自ずと誘われる。しかしその答えを急がず、次に「雨中」の名を冠した近世の二三のテキストにおける〈身振り〉そのもののあり方を確かめておきたい。

(イ)(略)此ごろ分龍雨日を連て、つれ〴〵の淋しさ慰かたもなき窓のうちに、霤のをとを友と、よしなき事の心に移り行まゝに、鵜の真似する鴉ながら、むなしき名を藉て問答をもふけ、ひとつ心を種として問つ答つやすからねば、物狂ひとや人の見るべきなれど(略)

(西村遠里『雨中問答』自序(安永五年(一七七六)、同七年刊)[23])

(ロ)花の都のかたほとりに九〻老衛門といふ者あり、仏によりて後世をもねがはず、和漢となく雅俗となく書をよめども、儒者にもたよらず、詩文詞章の学にはもとより拘泥ことなく、蓬 葎とぢそひ貧しきくらしをもなげかず、五月雨のふりくらすつれ〴〵に釜の泌音をきゝて楽しむさま、先は世上のくたびれ者と見えたり、その友に烏有といふものあり、尋来りてうき世談などして後、烏有いはく(略)(同書、巻一冒頭)

(ハ)五月雨ふりくらし寂さびしかりける日、老衛門例の釜をしかけ、松風の音そとおもふ世の中の夢のうちにも徒然をしのくたよりにこそとひとり言して、胠箧の篇をうちながめ楽しむ処へ、烏有またたづね来りて言やう、往とし五月雨のさびしき日尋来り、長日終日夜をかけてかたり楽しみしも、はや三とせになりぬ、そのゝちハ其時に似たる興もなかりしかバ、ひさしく長ばなしもせざりしに、今日はまたすぎし五月雨の日に似たるもの哉、巴山夜雨時にはあらねど、またむかしを思ひ出て、何成ともかたり意遣べきにあらずやとすゝむる折柄、また外より壱人、年もいまだ三十にもたらず、もの学ことも疎き俗人ながら、心ざますなをなる人尋きたり、これよき折ふしまいり適たり、我も雨中のつれ〴〵なるまゝに御はなし申さむと、時しも名にあひたりとおもひ(略)

（同『雨中問答後篇』巻一冒頭、安永一〇年刊）

(ニ)（略）誠に年光留らざること奔箭下流の水のごとく、はや七年も立ち去ぬ、幸ひ雨中の徒然ひらき見玉へと、煤気たる神棚開きて、鼠のくそともろとも取出しみてあれは、雨中の鐘子と題せり。人々是はけふの雨に叶し題號、おもしろき俳書なめりと、いざ開巻と、はや文臺におし直り筆をとるに、俳書にはあらで、伏見騒動小堀家滅亡の書也。是は珍巻と見るに、銘々筆を執て、我も我もと書写し侍るに、十巻となりけらし。

（略）　（『雨中之鐘子』（天明伏見義民伝）序）[24]

(ホ)（略）そのこと〴〵の、いつのころより、この府にははじまりぬといふ事、老びとの物がたりしけるを覚しまゝ、あるは犬馬の年をかさぬるまで、見きゝ侍りし事どもの、其あらましを、愚なる子どもに知らせ侍らむと、つたなき筆をとるは、文化八のとし未のさつき半にして、折しもけふ幾日、あやめもわかず降暮す、つれ〴〵のすさびにて、以心庵の窓のもとにて、かいつけなむ。　（堤主禮『雨中の伽』冒頭）[25]

(ヘ)川上貞麻呂主こたひ故さと信農（ママ）の国にかへりけるにつけて、こそよりより〳〵にとひまゐらせしことの一ことをたにかきてたまひかしと、ひたすらにいはれけれハ、いな舟のいなともいひかたさに、心におもふことのもゝかひとつをしるす、折しも五月雨ならねといたくふりつゝきて、つれ〴〵なれは、雨中のすさひとなん名つけておくりはへりぬ

文化十二年水無月　垂雲軒法眼浮木

（澄月『雨中のすさび』巻末）[26]

(ト)夫菓子者食中之珍美也、養気體解酇、或雨中或洗然悦志慰情、可以供父母、可以充独居者也、一日不可有無者也、以其能毒不可有不択也（略）　（『雨中之徒然菓子之方』冒頭）[27]

(チ)秋すき冬のきて、四方の山もあらはに木の葉ふり、時雨ももの、あはれにうちそゝきたるゆふへ、つれ〴〵やるかたなきまゝに、ふるき文とも取りひろけて心をすますところに、さよふけて戸のほと〴〵となるをとのきこゑけるを、時ならねはくゐなにもあらし、こからしの音つるゝにこそとおもひやり侍りしに、人のこゑして、こゝあけよといひしかは、筧（かけひ）の雫（しゝく）ならて露をとなふものもなきすみかなるを、あやなたれ成らむとたちいてつゝ引あけてみれは、ひころむつましかりしともの来れる也（略）

友かへりてのち、あまりうれしさに、こよひかのものかたりつかまつりし事をなんこのうちにかきつけ侍る、これも我らかことばもしもよこしまもあるやと、ちしきにみせたてまつらんためにかきつけ侍る、則その夜のありさまにまかせて、雨中の夜話となつけはんへるなるかし　（『雨中夜話』冒頭）[28]

これらの例の中に、雨中の身振りがより一層形式化された様をつぶさに見ることができるだろう。形式として整備されるとともに叙述された内容も、話柄によって（『国書総目録』がこれらの書に与えている分類名で示せば）、(イ)・(ロ)・(ハ)や(ホ)の「随筆」、

(ニ)の「記録」、(ト)の「飲食」、(チ)の「仏教」、あるいは(ヘ)の歌話などの様々な領域に及ぶことになる。[29] まことに〈雨〉は人に物書く志向を促すものだということを改めて思わざるをえない。

ただしここで見ておくべきなのは、そうした志向性における時代的な姿とでも言うべきものである。近世の、このように醇化された身振りを一方に置いて眺めるとき、先に少し観察を試みた中世の諸例における姿・形はどのような性格を備えているものとして捉えられるかを考えてみたい。

右で見た(イ)〜(チ)の諸例に即して、〈書く〉ことを通して得られる〈表現主体〉の志向のおもむきを読み取ってみると、どの例においても表現主体の志向は著しく己ならざる外部の他者へと遠心的に赴くように見える。それは叙述のスタイル、平たく言えば語り口によく現れている。「雨」は言わば何がしかの「友」を呼び寄せるかのようであり、(イ)〜(チ)はいずれも「友」としての他者と表現主体との共同性という語りの場や構造に支えられた、自在なダイアログの様式を作り出している。言うまでもなくそれは、そうした場や構造を自明な前提として受け取めながら書かれたものを享受する〈読者〉が介在しているということに他なるまい。

さて顧みて中世の雨中の身振りには、近世のように形式化される以前の諸特徴が色濃く滲んでいるように見える。書く主体の志向は、ひとりの自己の内部へと求心的に進む。語りの様式はモノローグ的であり、書く行為を通じて主体が語り説くべき相手の影はきわめて淡い。対読者意識は、近世の明確さに比して非定形もしくは未定形の様相を呈しているのである。書く主体の意識は無名の不特定の読者の待ち受ける次元などとは無縁であり、仮りに書く行為を通して主体と暗黙の裡に結びつくものがあるとすれば、それは何らかの至高の価値や悠久の絆のごときものであるように思われる。惣じて中世における〈執筆の身振り〉は、近世の、書かれたものの次元を明証事とすることによって得られる言語的-仮構的な諧調とは異質なものの特徴を帯びているようだ。端的に言えば、仮構的な次元に忍び入る現実的なもの-実体的なものの影であり、それが中世の書く主体のあり方にことに強く現れるのではなかろうか。「雨中」という〈執筆の身振り〉が形作る書く主体の時空は、常に生身の主体の現実の知覚や認識によってしっとりと浸潤されており、それゆえ先述した〈観照主体〉が重要な役割を担うものとして立ち現れ、〈身振り〉の言わば〈中世性〉を刻印するのだと考えられる。

5　前史——〈雨中〉の表現史的状況

反転して〈雨中〉の前史を眺めてみよう。中世における〈執筆の身振り〉の形成以前に、既に〈表現史〉——広・狭の両様の視野のもとで考えることができる。ここでは広義の視野を指す——においては、「雨中」にかかわる多彩な蓄積が存在していた。そうした蓄積はどのような与件となって中世の〈雨中〉を

とりまく表現史的状況を構成していたのか。以下、特に和歌の領域を中心に幾つかの系を抽出しながら、略述しておきたい。

(1)内密な時空の喩

そもそも〈雨〉は早くより、人に内的な空間の中にある秘かな視点を植えつけてきたことを、最早強調しなくともよいであろう。こうした内密な時空を素材とする表現は、既に古代和歌において一定程度の高度な喩の水準を達成していたと思う。万葉集の「あまつつみ」(雨乍見・雨障)「あまごもり」(安麻其毛理・雨隠)の用例は当の水準をよく示していよう。たとえば、

大伴女郎の歌一首

雨障常する君はひさかたの昨夜の雨に懲りにけむかも

後の人の追ひて同ふる歌一首

ひさかたの雨も降らぬか雨つつみ君に副ひてこの日暮らさむ

(巻四・相聞・五一九、五二〇)[30]

は、「雨」のもたらす実際の遣る瀬ない時と情況を核とする男女の駆け引きが、表現に転化されたものとして読むことができる。これらの表現の根底にあるのは折口信夫が次のように記すような、万葉人の心の働き――「つつむ」「こもる」の始源的な幻想にかかわる――であったとしてよいであろう。

あまは雨の形容詞的屈折。つつみは物の障碍を避けて、ぢつと籠つてゐる事で、雨にふりこめられて外へ出ない事を、物忌みにこもつてゐる様に言うたもの。或は古くからの習慣で、今も精進が足らなかつたと言ふ風に、罪悪観念と雨の障碍とを結びつけて考へてゐたかも知れぬ。

(『萬葉集辞典』「あまーづつみ」項)[31]

ただし折口の説く観点を、万葉人は「雨」に対して「呪力」や「禁忌」を認めていたという方向へ展開して、先の歌たちを理解するという立場[32]を採る必要はない。なぜなら「雨つつみ」「雨ごもり」の用例は、習俗はもとより、「呪力」や「禁忌」の働く次元からも逸れ出て、既に喩として十分な展開を遂げており、背後に作者による巧まれた言語的操作を認めうるからである。たとえば「雨ごもり」と同様の「―ごもり」の系列の諸例を辿ってみると、

朝霧ごもり　青垣ごもり　殿ごもり
葉ごもり　冬ごもり　繭ごもり
水ごもり　夜ごもり　夜霧ごもり

などを含む歌々においては、いずれも天象を含む自然の物象と内密な視点とが緊密に結合して喩的な機制を生み出していることがわかる。「雨ごもり」もそして「雨つつみ」もこれらと同様の喩の次元に並ぶものと見做しうる。私たちは、折口が「物忌みにこもつてゐる様に云うたもの」と述べている次元を重視すべきだと思う。「雨つつみ」「雨ごもり」は、「呪力」や「禁忌」などの、古代の幻想を背景とする実体的な心的機制そのものから離れたところで、語られ書かれた表現として位置づけうるのだと思う。

「雨つつみ」「雨ごもり」に見られる内密な視点と喩は勿論「雨中」の身振りと直結するものではない。むしろ両者の差異を問うことによって、古代・中世の視点と喩のあり方の差異を検討することになるだろう。万葉的な喩としての「雨つつみ」「雨ごもり」を脱化・離脱する過程の中に、中世和歌生成史の一局相を読み取りうるに違いない。それらの問題は暫く措いて、今は万葉集の「雨つつみ」「雨ごもり」とそれらに達成されている〈書く〉ことの次元を、中世の「雨中」へと至る表現史的な与件の一つとして数えておきたい。

(2)物語的設定

〈雨〉によって触発される盛興が時空をめぐる夢想と結びつくというモチーフは、王朝の物語においても既に成熟した表現や工まれた趣向・構想となって結実していた。『源氏物語』帚木巻の「雨夜の品定め」はその著しい例であろう。雨夜の円居に談話の場を設定する、という卓抜な着想はそもそも源氏作者によって全く独自に案出されたものなのか、そうだとしてそれはどのような語りの力学によるものだったのか、あるいは、発想の基となる、たとえば漢籍などの何がしかのテキストが介在してもいたのだろうか。今、右の問いを進める用意をもたないが、ともあれこの卓抜な設定は、その独自性ゆえに一つの範型ともなっている。中世、宗祇『雨夜談抄』(帚木別註)以下の註釈書を生むばかりでなく、雨夜語りという叙述の枠をもたらして、ことに近世、「雨夜」にかこつけた多くの書に類型を提供していることは周知の通りである。ただしそれは私たちの見てきた「雨中」の身振りにおける、モノローグ的時空へひたすら収斂しようとするかのような様式とは異質である。帚木巻でしつらえられている雨夜の談話の場という形式は、和歌の領域を軸とする中世の〈雨中〉と必ずしも融和せず、言わばそれを潜り抜けるように、むしろ近世の多弁な談話の世界へと続いているのではなかろうか。

(3)媒介としての漢語表現

言うまでもなく元来「雨中」は移入された漢語である。詩語としての深い由来をもつ「雨中」を、和語表現の中に摂取してきた長い受容史が存在するのである。初期の受容史の姿を、「雨中の花」という素材・趣向について精査した小島憲之[33]やその所論を承けて「雨中の花を詠じた和歌とその特徴、変遷」を主として「平安中期後期に於ける雨中の花の詠の系譜」の中に辿った丹羽博之の検討によって、私たちは、

漢詩的世界をそのままやみくもに和歌的世界に摂取するのではなく、和歌的情調に沿うように改変させていった歌人たちの詠歌態度[34]

を確認することができるだろう。漢語表現「雨中」を通して和歌表現はどのような表現上の機制を得たのか、と改めて問い直してみると、その一つは、「雨中」を含めて、「雪中」「雲中」「霧中」「霜中」「煙中」「光中」などにも見られる、自然の情景とその中にある様々な景物とを結合する試みという点に求められ

る。もう一つは、雨に閉じ籠められた者に自ずともたらされる内へと向かう〈まなざし〉――その際の〈視座〉はおおむね居所の内部に据えられている――である。たとえば、

　廬中、庵中、亭中、堂中、樓中、室中、家中、窻中、閨中、簾中、洞中、垣中、庭中、苑中、園中

などの空間と空間の内にある視座を提示する詩語や、

　閑中、夢中、病中、酔中

などの人の情況を時間の相で捉えた詩語は、「雨中」と全く同様に、作品の時空に設定される多様な視点のありかや可能性を詠作主体に強く意識させたに違いない。惣じて漢語「雨中」は和歌表現における〈詩的主体〉の在り方や構え方を自覚し、且つ実際の表現行為において試みるための重要な媒介となったのではなかろうか。

(4)歌題史のなかの「雨中」

　漢語・漢詩の表現としての「雨中」を片側において、和歌表現としての「雨中」の展開史を眺めると、その過程は、「雨中の花」の例で小島憲之・丹羽博之の説くように、まさに原拠が摂取され変容してゆく過程として捉えられる。而してその変容をもたらしたものは丹羽の云う平安歌人の「和歌的美意識」であり「和歌的情調」であったと考えてよいに違いない。ただし詠歌主体による創作行為の次元に一歩近寄って考えると、右のような変容の過程は、王朝歌人の詠作の前提でもあった題詠という枠組のもとで歌題史が展開してゆく過程と相補うものであったことに注意しなければなるまい。実際のところ「雨中」の歌題は、丹羽が「雨中の花の詠まれ方が多様化する」境として位置づけたおおよそ後拾遺集の頃以降、種々の景物と結び合いながら表現の領域を拡大・深化してゆく。言い換えれば、歌人たちは「雨中」を軸として拡張されあるいは分節されて成った新たな歌題に応えて、趣向・構想を緻密化していったのである。[35]勿論「雨中」と結合される景物そのものは、四季の歳時と繋がる素材や物象、あるいは恋や旅などにかかわる伝統的な景物の範囲を逸脱するものではないが、景物と題意の多彩化・深化に伴って「雨中」題の時空と表現されたことばの綾は――ことに平安末期の種々の試みを経て――確実に変転する。以下に二三参照する新古今歌人らの例は述べたような「雨中」題が深化されて、或る極点に達した様をよく伝えていると思う。

　たとえば慈円の「百首句題」に「雪中早春」「雪中待人」「舟中郭公」「羈中山路」などと共に見える「雨中籬竹」、あるいは定家「藤河百首」に「羈中聞鶯」「船中暮春」「山中紅葉」「山中滝水」と共に見える「雨中待花」そして「雨中緑竹」は、題の趣意自体を尖鋭化しようとする試みの現れであろう。慈円には「雨中述懐」題の十二首があり（拾玉集四四三〇～四四四一）、中に以下の詠を含む。

　軒の雨に成行く袖のしづくかなこころの雲や空にみつらん　（四四三一）

　おほかたもうき身もいかになれるよぞ窓うつ雨よ物がたりせ

よ　（四四三二）

今はただうき身うき世にありかねてまどうつ雨ぞ友となりぬる　（四四四〇）

かたるべき人だにもがなくらき雨の窓うつこゑにさむるよの夢　（四四四一）

これらは決して無媒介的な野放図な述懐ではなく、周知の朗詠「秋夜」所載の文集・新楽府「上陽白髪人」の詩句、ことに「蕭々暗雨打窓聲」のテキストを踏まえた表現であるが、同語や類似句の多用・反復を通して、「雨中」のもたらす内密な空間の内密な時が慈円の様式による自問自答や呼び掛けの文体――むしろ話体――で語られている。

あるいは建永元年七月二十八日院当座歌合において「雨中無常」の題で、定家・家隆はそれぞれ次のような作品を残している。

(イ)よそふればかさねてもろき末の露身をしる袖のうへの村雨　（拾遺愚草・下・無常・二六七五）

(ロ)すゑの露浅茅が本を思ふにも我が身一の秋の村雨　（玉吟集・下・雑部・三〇三四）

同じ折の後鳥羽院詠は新古今集に撰入されている次の歌である。

雨中無常といふ事を　太上天皇

(ハ)なき人のかたみのくもやしをるらむ夕の雨に色は見えねど　（新古今集・哀傷・八〇三）

(イ)(ロ)(ハ)のいずれも、題意に沿って、「雨中」のたたずまいとともに、故人を悼む心と後れた者の嘆きを歌っている。ただし常のごとく、ここにも媒介となるテキストが存在する。すなわち(イ)(ロ)の「末の露」は、新古今・哀傷歌巻頭の遍昭歌（七五七）「すゑのつゆもとのしづくや世中のおくれさきだつためしなるらん」を踏まえて、主題の重要な一面である「無常」を印象づけている。更に(イ)の「身をしる袖のうへの村雨」は――定家自身を含む新古今歌人らが試みている――古今集・恋四・業平歌（七〇五）そして伊勢物語一〇七段の「身をしる雨」を摂取しており、同時にこれには後拾遺集・恋二の次の二首に見える「みをしる」「袖」も影を落している。

みしひとにわすられてふるそでにこそ身をしるあめはいつもをやまぬ　（七〇三・和泉式部）

わすらるるみをしるあめはふらねどもそでばかりこそかわかざりけれ　（七〇四・読人不知）

(ロ)もまた古今集・秋上・千里の「わが身ひとつの秋」（一九三）を裁ち入れていよう。一方(ハ)は久保田淳の分析[36]に従えば、ここでもテキストはきわめて複合的に重ね合わせられている。作中主体によって見られている「なき人」の映像は、源氏物語の世界の葵の上であり、夕顔でもあり、また、まなざしは光源氏から転じて、桐壺帝の見る桐壺女御でもある。その上ここには『文選』「高唐賦」の朝雲暮雨の故事すら踏まえられているというように、映像と物語的文脈とは幾重にも折重なって、言語によっ

て構成された時空を築き上げている。

しかし同時にこれらは現実世界の死者たちとも直ちに結びついている。(イ)の場合、この作が家集の一連の良経追懐の歌々の続きに位置していることから明らかなように、此の年の弥生急逝した良経を哀悼する意図が籠められており、(ハ)もまた、院の寵愛した尾張局を追慕する。「雨中」はテキストに媒介され、精緻に練り上げられた喩であるが、同時にまた創作主体にとっては、曾て親交した故人を哭して流す涙を直ちによびさます、大気の気配そのものでもあった。このように高い水準に達した歌題「雨中」は、作品中に多次元的なまなざしや主体を設定するための重要な発条ともなるのである。

概観したように、万葉以来存した、内密な時空を喩的に設定しようとする意識、物語における語りの場の設定、漢語表現の受容史、歌題史における深化、これらの諸系は寄り集まり与件となって、中世の〈雨中〉に至る表現史的状況を形作っていたのである。さてこのような〈前史〉に照らすとき、中世の〈雨中〉の身振りはどのように位置づけられるかを改めて問い直すべきであろう。先に敷衍したところを取り纏めて言えば、〈私〉〈内〉〈自己〉〈個〉の諸項が形作る領域を強く自覚するという認識のあり方が、現実世界から相対的に自立する作品の時空を構築することを促すのだと思う。その際の鍵となるのは、右の諸項を統括する主体――詩的主体の一形態としての観照主体――である。〈雨中〉の身振りを主導的に担うのは此の主体であるが、では観照主体は書く主体の認識の領域でどのように形成され、表現を通してどのように立ち現れるか。その問いは、述べたような〈前史〉を視野の一方に置き、具体的な書かれたテキストそのものを分析することによって検証されるべきであろう。

6 『雨中吟』に至る通路

以上のように辿って来ると、やがて私たちは、中世文学の、ことに歌論にかかわるテキストの中にあって、「雨中」の語を書名に冠しているほとんど唯一の例――しかもなお検討すべき問題の少くないテキストである――『雨中吟』に直面することになる。この間の逍遙で得たわずかな視野は『雨中吟』にどのように届きうるかについて付言しておきたい。

『雨中吟』成立の含む問題は、早く風巻景次郎が簡明に絞った通り、[37]

一、十七首の歌の真偽

二、雨中吟の名称とその憲法的意義の附会

の二点に集約される。この二点は今日においてもなお考察の出発点たりうるであろう。右について論証の末に風巻の得た結論は次の通りであった。

第一に、『雨中吟』十七首の作は定家の自詠であって、阿仏尼より冷泉為相へ伝えた抄物のうちの一つである。

第二に、これが『雨中吟』と名づけられ、禁制の憲法となったのは、正徹・堯孝の時代と思われ、その原因は、二条家系の者の、自己防衛のための弥縫策に存していた。

風巻の所論は明快な展望を提示しているけれども、私たちは、論の帰趨がどこに達するかを別にして、事の第一の前提となる定家作としての真偽の問題をも含めて、風巻が「再吟味」の課題として提出したところを言わば再-再吟味してみたいと思う。

改めて私たちの観点を加えて先の二点について、問題点を枝分けして言い換えれば、次のようになるだろう。

(a)問題の十七首は、定家作であれ非定家の作であれ、いつ、どのように、いかなる目的をもって詠出されたか。そして、いつ、どのように、なぜ十七首一纏まりのものとして整えられたのか。

(b)問題の十七首に「雨中吟」の標目を与え、「未来記」の標目をもつ五十首の後に一対一具のものとして結合し、奥に識語と定家の署名――此の識語の有無、また識語ののちの署名の有無は書誌的な目安ともなる――を付して一連のテキストにするという、今日伝存している当該書のもっとも一般的な形態を、誰が、いつ、どのような段階を踏んで、なぜ作製したのか。

右の問いをつきつめると、(a)は、定家の作品・表現の真作と偽作を分かつものは何かという問いに、(b)は、定家の営為と非定家――むしろ偽-定家（＝プソイド-定家）――の営為を分かつものは何か、という問いにそれぞれ行き着くだろう。

ただし右の問いをもう一つの問題が覆っている。すなわち、(a)に云う十七首の成立と、(b)に云うテキストとしての「雨中吟」の成立ののちに、これら一連の歌々とテキストを受容し、また註釈をも施してきた長い享受史が存しており、それは(a)・(b)とは異なる第三の問題領域を形作っている。

さて、これらの一切の背景に、小稿で検討してきた〈雨中〉をめぐる問題が介在していると考えてよい。(a)に関して言えば、『雨中吟』十七首の前半の八首には、いずれも「雨」の語がよみ入れられており、これらは「雨中」の表現史（狭義）において、そして先記した「雨中」をめぐる表現史的状況の中で然るべき位置を占めているはずである。(b)に関して言えば、「雨中吟」と名付けられたテキストは、〈雨中〉という〈執筆の身振り〉の介在なしには成立しえなかったであろう。

第三の享受史の領域にもまた〈雨中〉は密接にかかわっている。『雨中吟』の「雨中」の意味するところに理路を見出そうとする諸註の解釈の内容と註者の姿勢そのものに、当の註者の属する時代における、身振りとしての〈雨中〉の様相が忍び入っているのだと思われる。

これらの問題を整理し振り分けながら、私たちの再-再吟味は進められるべきであろう。小稿では狭いながらも、問題の在り処へ至る通路を設けてみた。ただし小稿の真の意図は、述べた

ような目的の以前に、中世における雨のたたずまいと、それを眺める者のまなざしと個的な時間・空間、そして〈物書く〉ことの身振りとその歴史性を、前史・後史に照らしまた初原に立戻って考えてみるところにあった。テキストとしての『雨中吟』に対するためには、以上のような〈雨中〉をめぐる（狭広両義に亘る）表現史の富を尋ねておくべきだと考えたのである。

〈註〉

（1）『校本宮澤賢治全集』4（一九七六　筑摩書房）189頁。

（2）高橋隆三編『実隆公記』巻九（一九六七　続群書類従完成会）による。

（3）尾崎雄二郎・島津忠夫・佐竹昭広『和語と漢語のあいだ　宗祇畳字百韻会読』（一九八五　筑摩書房）。

（4）追補・増補・整備などの手が加わっていることを考えうるか。

（5）従って、原理にかかわる問いは惣じて無益だと主張するのは無論当らない。むしろ「文学表現」の概念とその根拠は認識論的な冒険のもとで絶えず再定義されてゆくものだと思う。当面の問題に関しては、対象を捉えるための諸視点が福田秀一『中世文学論考』（一九七五　明治書院）第五篇・第四章に示されている。最近の論として次を参照。森田兼吉「漢文日記の記録性と文学性」（日本文学協会編『日本文学講座』7「日記・随筆・記録」（一九八九　大修館書店）所収、位藤邦生「日記文学の主題について・再説」（『中世文学研究』16　一九九〇・八）。なお記録あるいは漢文日記における「文学性」という問題に対して、「仮名記」は以下のような観点を私たちに要請するのではないか。(イ)『実隆公記』の例に見られるような真名・仮名とりどりに書かれた「別記」の類や、森田の指摘している『明月記』の仮名文体の部分の例などをも組入れるならば、「漢文日記」の概念内容を、単一の次元ではなく複次的な次元において捉えうる。(ロ)「日記」の記載内容や主題性の吟味と併せて、文体論的な検討は不可避となる。

（6）陽明叢書・記録文書篇・第三輯『後法成寺関白記』二（一九八五　思文閣出版）による。

（7）久松潜一『歌論集(一)』（一九七一　三弥井書店）。分類名称は同解題による。

（8）新校群書類従・巻四八七（第21巻・雑部三）による。なお(a)(b)(d)は日本歌学大系、同別巻による。

（9）井上宗雄『中世歌壇史の研究　南北朝期』（一九六五　一九八七改訂新版　明治書院）264—265頁参照。なお古来風躰抄の伝本については松野陽一『藤原俊成の研究』（一九七三　笠間書院）349頁以下参照。

（10）（9）井上参照。

（11）高松宮旧蔵自筆本模写本による。下巻・雑・二六〇〇。なお同巻・春「おなじ三月八日、内よりしのびて召されし三首のうち」（二〇八三・二〇八四）、秋「仁和寺宮よりしのびてめされし、秋題十首承久二年八月」（二二五一～二二六〇）、雑「承久三年、内より召されし述懐歌」（二五八七）参照。歌番号・引用本文は久保田淳『訳注藤原定家全歌集』上下（一九八五・八六　河出書房新社）による。

（12）定家の奥書類の中に〈私〉系列の奥書という一類を立てうるか。

（13）日本古典文学大系本。この歌は千載集に入集（雑上・九六七）。

（14）「くらしかねたる」自体の用例は「いとどしくくらしかねたるこの比のながながしげに春雨ぞふる」（宝治百首・三五四）などの鎌倉中期以降のそれを拾いうる。

（15）もとより単数ではない。むしろ幾重にも分裂しまた生成する。理論的な問題については更に考えるべきだと思う。

（16）自ずと〈雨〉のもたらす感興を主題とする詞華集を編むことができる。中村汀女編『雨』日本の名随筆43（一九八六　作品社）参照。この種の書に位置づけうるものとして、溯れば津守国冬の祈雨百首（群書類従巻一七六）、上田秋成「十雨言」（藤簍冊子四）「十雨余言」、加藤千蔭等の『雨の言葉』（国会図書館蔵二三七・一三三）などを挙げうる。

（17）岡麓校『入木道三部集』（一九三一　岩波文庫）による。

（18）一方、雨になどかかわらぬ書への没頭を云う言説もある。欧陽脩『筆

説』「夏日に書を学ぶこと」に「こうして、手もやめず、わきめもふらず筆をふるつているときには、稲妻がきらめいたり、雷がなつたり、雨がふつたり雹がふつたりしても、ふりむいている暇はないのである。」とある。抄訳による。中田勇次郎『中国書論集』（一九七〇　二玄社）188頁。

(19)　書くことのみでなく、広く表現行為について言いうるかも知れない。「箏の琴、和琴、しらべながら、心に入れて「雨ふる日、琴柱倒せ」などもいひ侍らぬままに、塵つもりて」（『紫式部日記』）など参照。

(20)　ガストン・バシュラール『水と夢』（小浜俊郎・桜木泰行訳　一九六九　国文社）。

(21)　ちなみに雨の日、動物園で類人猿たちをながめると、彼らの挙措振舞の中にヒトと変りなく〈雨〉に感応しているかのような気配すら感じられ、思わず「雨の日の霊長類の憂愁」というような着想にもとらわれる。ただしそれは、霊長類学者の周到で忍耐強い調査・分析とは無縁の感想と云うべきだろう。なお河合雅雄編『人類以前の社会学アフリカに霊長類を探る』（一九九〇　教育社）より示唆を得た。

(22)　木村重信『はじめにイメージありき』（一九七一　岩波新書）参照。

(23)　(ロ)・(ハ)とともに京都大学附属図書館蔵本（I-八四　ウ・一　五冊）による。

(24)　伏見義民碑保存会編・発行（一九三七）

(25)　『随筆百花苑』15（一九八一　中央公論社）による。同書の解題（中村幸彦）参照。

(26)　今治市河野信一記念文化館蔵本（三三五・六七二）国文学研究資料館蔵マイクロフィルムによる。

(27)　都立中央図書館蔵加賀文庫本（三八一〇）による。なお(ト)(チ)の成立年時は不詳。便宜的に一連の後に並べ置く。

(28)　尊経閣文庫蔵本（二一・五〇）による。

(29)　他に「教訓」に属する松平乗邑『雨中訓』（西尾市立図書館蔵岩瀬文庫本一八〇・一八四）もある。ただし同書の名は後人によるか。

(30)　日本古典文学大系の訓読による。

(31)　『折口信夫全集』6（一九六六　中央公論社　初出は一九一九年）。

(32)　古橋信孝「雨の呪力」（『雨夜の逢引（上）』）『月刊言語』（一九九〇・三）参照。論者の同一趣旨の所説は『古代の恋愛生活』（NHKブックス　一九八七　日本放送出版協会）に見える。小稿の論点に立てば、以下の諸点を強調することになる。(イ)「雨」自体に「呪力」や「禁忌」が内在しているのではもとよりない。(ロ)「雨」に、現実世界を超えた高次の力がまとわりついているのだとすれば、それは「雨」をも含む諸々のモノに潜む力、あるいはモノに宿る魂とも言うべきものである。その根源にあるのはモノがヒトにもたらす始源的な物質的想像力の累積したもの、すなわち、この場合で言えば〈雨〉の原イメージである。「呪力」や「禁忌」などの機制の遙か以前に、人類史的もしくは生物史的な由来をもつ〈雨〉の原イメージが存在すると考えられる。(ハ)「雨つつみ」「雨ごもり」のイメージは、〈雨〉の原イメージと「つつむ」「こもる」という所作・動作・行為についての幻想とが結び合うことによって倍化される。「雨つつみ」「雨ごもり」の、書かれた喩としての次元については本文中で論述するごとくである。なお〈雨〉の原イメージが民俗的想像力に裏打ちされたヴィジョンによってどのような特性を育むかは、もう一つの問題領域を構成している。

(33)　小島憲之『古今集以前』（一九七六　塙書房）。

(34)　丹羽博之「雨中の花」（『平安文学研究』79・80　一九八八・一〇）。

(35)　瞿麦会編『平安和歌歌題索引』（一九八六　瞿麦会）参照。それは単に個々の歌人においてなされるのみでなく、折と場を同じくして、あるいは歌人相互の交流のもとで多彩に試みられている。

(36)　久保田淳『新古今和歌集全評釈』4（一九七七　講談社）参照。

(37)　『新古今時代』風巻景次郎全集6（一九七〇　桜楓社　初出は一九三一年）参照。